

# 大海を泳ぐ蛙

## ——「教養教育」とは何か——

田 村 亮 子

### Frogs Swimming in the Ocean: What is the New Role of Liberal Arts?

Ryoko Tamura

現在、大学に対して社会が求めるものは、その第一として、卒業後の仕事に直結する専門教育である。それは、その大学を卒業することによってどのような「資格」を取得できるかということが、大学選択の際の大きな要素のひとつとなっていることから容易に理解できる現実である。

この不況の時代にあって、大学教育は生活の糧を得る助けとなるものをこそ提供すべきであるという発想は重要なものであるには違いない。しかし、大学教育の役割を職業教育に特化させてしまうことは、大学という教育機関であってこそなしうる教育の本質を自ら放棄してしまうことにつながりかねない。

職業訓練たる専門教育は大変に重要、かつ、必要なものである。しかし、自ら身につけた専門技能が、他の専門とどのように関連しあい、その技能を行使する際、自分が行う行為のひとつひとつが他者に及ぼす影響を考え、人間としての自分の存在と、その行為の根本的意義を問い、その問いが導く様々な世界へ縦横無尽に知性の探索のアンテナを広げ、そのようにして広げられた世界から改めて自らの存在とその行為のあり方を見つめるというような動きを可能とする精神を、時間をかけて育てることをしなければ、専門教育は数多くの迷える精神を輩出する教育に堕してしまう危険性を伴うと考えられるのである。

しかし、ここで問題となるのは、専門教育の目標とするところの明確さに比して、教養教育というものが曖昧さにおおわれている現実である。教養教育が、すべての青少年に必ず与えられるものであり、従って、教育を受ける側に、そのような教育を受けるか

否かの選択の余地がないのであれば、教養教育を実際に施す過程において、ゆっくりと時間をかけて、その意義を知らしむることが可能であり、過去にはそのような時代が確かに存在していた。

しかし、現代において、学生達は、未だ教養教育に触れていない時点で、他の専門教育と教養教育を並べ、それらを取捨選択することが可能となっている。そこで起こることは、たとえるならば、中身がわかりやすいパッケージに包まれたお菓子と、大変おいしくはあるのだが、パッケージが目を引きかないお菓子の選択に似ている。どちらも食べたことがない人間が、それらから一つを選択せよと言われれば、明瞭なパッケージの方を選択しがちとなるのは無理からぬことである。さらに、売り手とすれば、買い手が手に取りにくいパッケージのお菓子は、売りはしても、中心商品とはしないであろう。

このような事情から、現代において大学教育に携わるもの達は、教養教育の重要性を認識しつつも、その説明の困難さの前に、教養教育をカリキュラムの奥に引っ込めたり、説明そのものを諦めてしまう傾向に陥っているのではないかと危惧するものである。

ここで筆者が問いたいのは、次の問である。

買い手が思わず手に取りたくなるような教養教育のパッケージを描き得ないものであろうか？

しかし、それを可能とするためには、何よりも、教養教育というものが、これまでのあり方を根本的に見直し、新しい時代における基礎に立つ新たな研究と教育の一体系として生まれ変わる必要がある。つまり、パッケージ以前の中身の練り直しである。

本論は、このような要請に基づいて、新しい時代に向けた「教養教育」はいかなるものかについて、その性質を基本から見直し、その見直しに基づいた「教養教育」の意義を、具体的に高校生に語りかける形で説明を試みようとするものである。

---

## 高校生の皆さんへ

大学へ進学しようとするとき、皆さんはどのようなことを期待しますか？そして、どのような教育を求めて大学を選びますか？

この不況の時代であるから、大学へ行ったら、何よりも、将来就きたい職業に結びつ

く資格をとる勉強をしたい、と考える方が多いのではないのでしょうか。自分の就きたい職業が明らかであり、その職業に結びつくトレーニングさえ受けることができれば十分だ、と考える方もあるかもしれません。その一方で、就職のためには職業訓練が必要であることは確かだけれど、自分は将来どのような仕事につけばよいのだろうか。自分に向いている職業、生き方はどのようなものかまだわからない。だから、どのような専門の勉強をしたら良いかわからない、という方もいるでしょう。

ここで話しようとするのは、大学教育においてしばしば「専門教育」と対比して考えられる「教養教育」というものについてです。「教養」という言葉は「教養のある人」とか「教養をつける」などと使われることが多いのですが、そもそも「教養」とはいったい何なのでしょう。そして、なぜ、「専門教育」だけでなく「教養教育」が必要なのでしょう。それについて考えてみましょう。

## 1. 知りたい欲求

人間は他の動物にはない高度な知性を持っています。動物も知性を持っていますが、彼らがその知性を使用する目的は、自らが生存することと、子孫を増やすことにおおよそ限られています。ところが人間は、自分達が日々生きることに必要なこととは直接結びついていないようなことまで、様々なことを知りたがります。それは、人間の知性が、自分の日常の物事から始まって、この世に存在するすべてのもののすべてを知りたいという欲求を持っているからです。食欲と対比させてみると、その特殊性がわかるかもしれません。

食欲という欲求は、空腹が満たされれば、次におなかがすくまではおさまっています。おなかを満たすことによって、かえってもっとおなかがすくということはありません。しかし、人間の「知りたい欲求 (the desire to know)」は、その欲求に促されて物事を理解すればするほど強くなります。満たされれば満たされるほど、その欲求は拡大していくのです。

では、なぜ、人間の知性はそのような特徴を持っているのでしょうか。

それは、人間がこの宇宙と歴史に対して果たしている役割の特殊性と関係しています。逆に言えば、その知性の特殊性によって人間は他の動物には不可能な特別な役割を担っていると言えるのです。その役割とは何でしょうか。

## 2. 小柴さんのエピソード

ここでひとつのエピソードをお話します。

平成14年に田中耕一さんと並んでノーベル賞を受賞した小柴昌俊さんのお話です。

ノーベル賞の受賞が決まった後の様々なインタビューの一つで、インタビュアーが小柴さんに次のような質問をしました。

「(小柴先生の研究は) どんな役に立つのですか？」

この質問に対しての小柴氏の答えは

「役には立ちません。」

というものでした。

このインタビューをテレビでご覧になった方があったとしたら、このやりとりを見て、こんな質問を抱きませんでしたか？

「役に立たない研究に、どうしてノーベル賞が与えられるのだろう？」

## 3. 自然事物 と 人間事物

この問いに答えるために、ここで、「自然事物 (natural things)」と「人間事物 (human things)」という概念を紹介しましょう。

「自然事物」というのは、その存在の成り立ちに「人間の理解と行為」が介在していない物事のことです。例えば、火。火というものは、人間がこの世界に存在する以前から自然界に存在している現象の一つです。すでに存在していた「火」という現象を、人間は発見し、その現象に「火」という名前を付け、「火とは何か」という質問をするようになりました。そして、この「火とは何か」という質問に対して人間は様々な答えを見いだしていきました。

紀元前のギリシャでは、すべての存在物は4つの要素によって成り立っている。土、水、空気、火である。従って、火とは「すべての存在物を成り立たせる基本要素のうちの一つ」であると考えました。しかし、人間は、この解答に満足することができず、「火とは何か」という問いを更に問い続けます。18世紀になって、プリーストリーという科学者が、次のような答えを出しました。それは、存在物の中にはフロジストンという構成要素が入っている。このフロジストンがその物体から離れるときに起こる現象が「火」である、という説明です。しかし、さらに問いは続き、次に、ラヴォアジエによって、

見いだされた答えは、火とは「ものが酸素と結合する際に起こる現象のひとつである」というものでした。

ここで見ようとしているのは、科学の歴史ではありません。着目していただきたいのは、次の点です。

#### 4. 「火」は変化しない。「学校」は変化する。

それは、「火とは何か」という問いを人間が問い、その質問に対する「答え」、つまり、「火とは何かという理解」が時代と共に変化していったにもかかわらず、「火」そのものは（燃える材料は様々であるにしても）太古の昔燃えていたと同じように、変化なく現代も燃え続けている、という点です。簡単に言えば、火について、人間が理解しようがしまいが、火は火であり続けた、ということです。

一方、「人間事物」とは「人間が考え、行為をすることによって生み出されたもの」です。別の言い方をすれば、人間がいなければ存在しえなかったものです。人間は、知りたい欲求に基づいて、すでに存在する物事について理解することを求める習性をもっていますが、その欲求に従って理解すればするほど、今度は、いまだ存在していない物事を作り出したいという欲求に駆られます。その結果、様々なものを新たに作り出すようになったのです。

例えば「学校」というもの。昔々、子供達は、それぞれ自分の親達からいろいろな物事を教わっていました。狩の仕方、穀物を調理する方法、などなど。しかし、様々な物事についての理解が蓄積されればされるほど、自分の子供たちに教えなければいけない事柄はどんどん増えてきます。親達にしてみれば、生活のためにしなければならない仕事をこなしながら、多くの知識を子供に教えることが大変に感じられるようになっていったことは容易に想像されます。同時に、人間達のグループが安定していくにつれ、そのグループの中に、他の人よりも教えることが上手な人があることがわかってきます。そうすればこんな発想が生まれてきます。「何人かの子供達を集めて、教えることが得意な人が教えればよいではないか。その代わり、教える人が教えることに専念できるように、その人の生活のために必要なことを代わってやってあげよう。」こんな風なシステムが次第に発達し、そのシステムとその場所に「学校」という名前が付けられるようになったと考えられます。

「学校」というものは人間の知性によって生み出されたものです。しかし、「学校」という名前は存在しても、その言葉の意味するところは、時代と場所によって大きく異なっています。例えば、古代ギリシャのアテネにあり、学校(school)という名前がそこから発生していった「スコラ」と呼ばれた学校。テレビドラマ「大草原の小さな家」に登場するアメリカの開拓時代の、教会を使った「学校」。日本においては、江戸時代の町人が読み書きを学ぶために作られた「寺子屋」。皆さんが6才の時から在学してきた、小学校、中学校、高等学校。これらは、すべて、「学校」であり、「教育の場」という意味で、共通する部分を持っています。しかし、その共通の部分以外の性質、成り立ち（対象生徒、教師、教育方法、場所、目指すもの等）は、互いに大変異なります。なぜ、異なるのでしょうか。

それは、人間が生み出したものは、人間の「理解」が変化することによって、その「成り立ち」も変化してしまうからです。先程「自然事物」の例として述べた「火」は、それについての人間の理解がいくら変化しても、「火」が「火」であることに変化はありません。しかし、人間が生み出したものは、それについての人間の理解が変化するたびに、その成り立ちそのものが変化してしまうのです。ですから、「学校」という例にもどれば、時と場所によって、「学校」というものについての理解が異なり、それぞれの具体的状況にあった学校のあり方が模索されることによって、その性質そのものが変化してきたわけです。

こんな風に人間達は、知性を働かせることによって、目に見えるもの、見えないもの、様々な「人間事物」を生み出してきました。以前から存在する自然事項を材料として、様々な化学薬品を作り出し、「国」というシステムを作り出すことによって、宇宙から見たら、何の線も書かれていない大陸に、国境という線を引いたのも人間です。

もちろん、人間事物にはその材料として自然事物が使われていることも多いわけですから、人間事物が変化していくということは、自然事物の構成要素自体は変化していかなくとも（つまり、水は水に変わりはない）、自然事物と自然事物の相互関係は変化していく可能性を含むことになります。例えば、ダムは自然事物を材料として作られる人間事物ですが、ダムをつくることにより、その川の水と、たとえば、その川に住む動物や生物の関係は変化してしまいます。

さて、ここで次のような問題が出てきます。

人間が知りたい欲求、作り出したい欲求によって生み出されるものはすべて良いものだろうか？人間の理解はいつも正しいのだろうか？人間はいつも良いものを生み出しているのだろうか？人間の理解が変化することによって、「人間事物」はより良いものに変化しているだろうか？というような問題です。この問題に答える前に、もうひとつの人間の特殊性について触れておかねばなりません。

## 5. 空腹の猫と人間

それは人間の行為の特殊性です。人間は人間事物を生み出し、理解を積み重ねることによってそれを変化させていくことができます。しかし、それ以上に重要なのが、人間が他の動物には不可能な行為をすることができるということ、そして、そのような行為が積み重ねられた結果、行為の選択肢が多くなったという特徴があります。

猫がおなかですいたとします。猫はおなかを満たすためにえさを捜します。そんなときに、通りかかったお店の店頭の手の届くところにお饅頭が並べてあるとします。猫はどうするでしょうか。かなり高い確率で、そのお饅頭のひとつを口にくわえて逃げ去るのではないのでしょうか。では、同じ状況に人間がおかれたらどうでしょう。猫と同じ行動をする確率はきわめて低いでしょう。なぜでしょう。

人間の毎日の生活は様々な行為をなすこと（あるいは、なさないこと）によって成り立っています。その行為の一つ一つのほとんどがいくつかの選択肢を持っています。あるとき、あなたはおなかですいて何かを食べようとする。とたんに、あなたの頭にはいくつもの選択肢が展開します。先ほどの猫と同じように、目の前にあるお饅頭をとって食べるか (A)。それとも、しばらく我慢をして、家に帰り、冷蔵庫の中にあるものを食べるのか (B)。それとも、近くのレストランで何かを食べるのか (C)。あるいは、体重を気にしてそのときは食べないことにするのか (D)。(B) あるいは(C)を選ぼうとすれば、さらに、何を選んで食べるのかを考えなければなりません。

猫には、このような選択の余地はなく、あるいは、あったとしてもその数はごく少なく、欲求が命ずるままに、選択肢がごく限られた行動をとるほかありません。しかし、人間はお金を発明し、冷蔵庫を生み出し、レストランを発達させてきました。これらは他の動物には不可能なことです。こうして、他の動物ができない行為を様々な積み重ねることによって生み出された文化は複雑になり、複雑になればなるほど行動の選択肢が

広がることになったわけです。このことは、同じ人間でも、原始人と現代人の「空腹を満たす」ためにとりうる行為の選択肢の差を想像してみればわかるでしょう。

いや、私は、毎日、昼食にはおそばしか食べない。という人がいるかもしれませんが、しかし、それは、他に選択の余地がないからそうしているというよりも、選択した結果そうしているにすぎないのではないのでしょうか。なぜなら、おそば以外の物を食べたいと思えば、特殊な場合を除いては、いくらでも他のものを食べることができるからです。

人間の行為には選択肢が多いということは、次のことを意味します。つまり、人間である限り、日常の一つ一つの行為を行う際に「どのような行為をすべきか」について知性を使って考えなければならないということ、そして、実際、そのように選択して行動しているということです。もちろん、毎日の一定の行為はいったん選択されたあかつきには習慣となり、毎回選択することなしに行っている部分も多いのですが、基本的に、何らかの行為を行うときには、選択肢にあがってくる行為の一つ一つの意味するところについて考えてから行っているはずです。

## 6. 闇を好む動き

ここで先にあげた質問に戻ります。人間によって生み出されるものはすべて良いものだろうか？人間の理解が変化することによって、「人間事物」はより良いものに変化しているだろうか？人間が考えることによって、人間事物と自然事物はより良い関係に発展しているだろうか？人間はいつも正しく選択しているだろうか？という質問です。

この問いに対する答えはあまり難しくはないでしょう。答えは、「必ずしもそうとはいえない」ですね。なぜでしょうか。

人間の知性の欲求は、存在するもののすべてのすべてについて正しく理解したい、良いものを作り出したい、より良い行為を選んですることによって、よりよく世界を発展させたい、という方向に向かう性質を持っていると考えられます。しかし、人間がこのような知性の本来的な動きに忠実に知性を働かせるか否かは個人によって大きく異なります。なぜなら、真理を求め、善を生み出す欲求を「光を求める欲求」と考えるならば、私達の精神の中には「闇を求める欲求」も存在するからです。

私達自身の人生と、私達の住む世界と歴史がよりよい方向に進むことができるためには、我々個々人に可能な限り、知性を働かせ続けることが必要不可欠です。しかし、知



性を働かせ続けることは、時に、面倒くささをともなったり、現在の生活の心地よさを覆すことにつながることがあります。

ここで、もうひとつ、他の動物達の行為と人間の行為の異なる点をあげます。他の動物達の行為において、自分（あるいは自分の家族や群れ）の現在、自分の住む具体的な場所に関すること（例えば、一匹の熊にとって、今の空腹を満たす餌をどうやってとるか、など）以外のこと（例えば、この山に住む熊全員がより安全に生きるためにはどうしたらよいか、など）は選択肢として意識の中に現れてこない、あるいは、現れてくるとしてもごく限られたレベルでしかない、ということです。つまり、動物達が行為をする場合、ある行為をすることによって未来にどのような影響が及ぶかとか、自分の住んでいる場所以外の世界にどのような波紋を広げるかなどということを考えることはありません。彼らの知性は自分の現在の生活に関係ない「真理」を問い求めるということとはできませんし、そうすることの意義を理解することもあります。また、彼らにとっての善とは、今、そのときの、一匹の動物としての欲求を満たすことができるか否かがその基準となります。ですから、おなかをすかせている猫にとっては、目の前にあるお饅頭を食べることこそが善となるのです。

人間も動物の一種ですから、このような、他の動物と同じような限られたレベルでのみ考え、今ある動物的欲求を満たしたいという動きを持っています。人間は、動物であると同時に人間であるために、動物的欲求と人間独自の欲求である知的欲求とにいつも板ばさみになっているわけです。動物的な欲求は生物として生存し続けるためには大変重要な欲求であるため、とても強い力を持っています。したがって、知性の働きが弱い場合、知的欲求が動物的欲求に負けて、動物的欲求を満たすことと、それだけでなく、それによって得られる心地よさを優先するために、知性の働きにブレーキをかけることがしばしば経験されます。これが「光を求める動き」が「闇への傾き」に負けるということです。

例えば、タバコを吸うべきか否か。よくよく頭を働かせれば、「タバコを吸うべきではない」という結論が出る可能性が高いでしょう。しかし、後の健康のことより、今ひと時のタバコがもたらす心地よさの方が大切だ。それに、タバコをやめるためにはしんどい思いをしなければならない。だったら、タバコの害についてあまり深く考えることなどやめよう、と考える。そして、その結果、タバコに関しての問題について考えること

に自らブレーキをかけてしまうというような動きです。

または、こんな例もあるでしょう。ある化学薬品を製造した。使っているうちに、その薬品は人間の健康に害を及ぼし、自然の破壊をもたらすことが少しづつわかってくる。害をもたらす限り、製造を中止すべきかもしれない。しかし、この薬品は大変な利益をもたらす。その利益で自分達の生活が潤っており、楽な生活ができる。とすれば、自分達が楽な生活を続けるためには、この薬品のもたらす害については黙っていよう、データを隠して他の人々に知らせまい。というような動きです。

あるいは、現在の学校というシステムに様々なほころびが生じてきた。そのほころびにひっかかった子供たちが学校の外にはじき出されている。しかし、学校のより良いあり方を考え、そのように学校を変えていくことは面倒なことだ、したがって、学校とは昔からこういうものだとか決まっているのだから、それに合わせられない子供達のほうに問題があるとして、考えることを打ち切ってしまう。などなどです。

ここまで読むと、こんな質問が出されるかもしれません。闇を好んではいけないのだろうか。あまり物事を深くとらえず、他の動物と同じレベルで物を考え、動物的欲求にしたがって今のことだけ、自分のことだけを考えて行為することがどうしていけないのだろうか、と。この質問にお答えするためにアルフレッド・ノーベルのお話をしましょう。

## 7. ノーベルの悲しみ

先に述べた小柴さんと田中さんが受賞したノーベル賞は、アルフレッド・ノーベルというスウェーデンの実業家の遺産によって生み出された賞です。ノーベルはなぜ、このような賞を作りたいと思ったのでしょうか。

ノーベルはダイナマイトを発明した人です。ダイナマイトは人間の歴史にとって画期的な発明でした。それまで、トンネルを掘ろうとすれば、多くの人間達が、ノミとツチでトンテンカン、トンテンカンと莫大な時間と労力を費やす必要がありました。しかし、ダイナマイトが発明されることによって、それがなかった時代に比べると、比較できないほど簡単にトンネルを掘ることができるようになったのです。トンネルだけでなく、様々なことがダイナマイトを使うことによって可能になってきたのです。

ところが、ノーベルが予想もしなかった事態が発生しました。ダイナマイトが戦争の

道具として使用されるようになったのです。それまでの戦争では、刀、鉄砲、石を飛ばす大砲など様々な武器が使用されてきましたが、そのどれをとっても、それらの武器によって殺せる人間の数はさほど多くはありません。しかし、ダイナマイトを使えば、一度に大量の人間達を殺傷することが簡単になったのです。それによって戦争による犠牲者は、それまでの時代には想像もできなかったような数に膨れ上がるようになりました。ノーベルは深く苦悩します。自分が人間達の幸せのために、良かれと思って発明したダイナマイト。それが多くの不幸を生む道具となってしまった。何故、ダイナマイトなど発明してしまったのだろう。しかし、いくら苦悩しても、いったん発明されてしまったダイナマイトはノーベルの苦悩をよそに、性能は高められ、大量に生産され、販売され、皮肉なことに発明者のノーベルは大金持ちになります。死に臨んで、ノーベルが考えたこと。それが、自分はダイナマイトを発明することによって多大な不幸の原因を生み出してしまった。せめて、それによって得たお金を、人類と世界が良い方向に動くことに貢献する研究や行いをした人々を助けるために使おう、ということだったわけです。こうしてノーベル賞が生み出されました。

## 8. 両刃の剣

このノーベルの物語が示すことのひとつは次のふたつことです。

まず第一に、人間には他の動物にない特殊な知性がある。その知性に導かれて、人間は様々な物事を理解し、生み出すことができる。しかし、善を生み出すことを意図して作られはしても、それが人間事物である限り、作り出されたものが未来永劫、絶えず善を生み出すとは限らないということ。そして、生み出したものが未来の世界と歴史にどのような影響を及ぼすかということは、それを生み出した当事者でさえも把握しつくすことはできないということ。

もうひとつの点は、人間は、人間事物と自然事物を使って他の動物にはできない行為をし、それによって、人間界を含めた世界と歴史全体がよりよく発展するのを助けることができる。しかし、同時に、人間は、闇への傾きに負け、知性の本来的動きに逆らって、人間の知性ゆえに可能となった財産を濫用し、ゆがめ、それによって他の動物ではなしえない規模で宇宙歴史万物を破壊に導くことができる、ということです。

人間以外の動物が今のことだけ、自分のことだけ考えたとしても、それによってもた

らされる善も小さければ、悪も小さいのです。しかし、人間が、知性の欲求よりも動物的欲求を優先させ、光よりも闇を良しとし、自分の今だけにとっての善を求めることに知性の働きを限定すれば、他の動物が逆立ちしてもなしえないような大きな悪を引き起こすことが可能になるのです。「最良のものの腐敗は最悪」ということわざがあります。人間は最良な能力を持つがゆえに、その能力が腐敗したときに引き起こされる悪は最悪なものとなりうるという意味です。

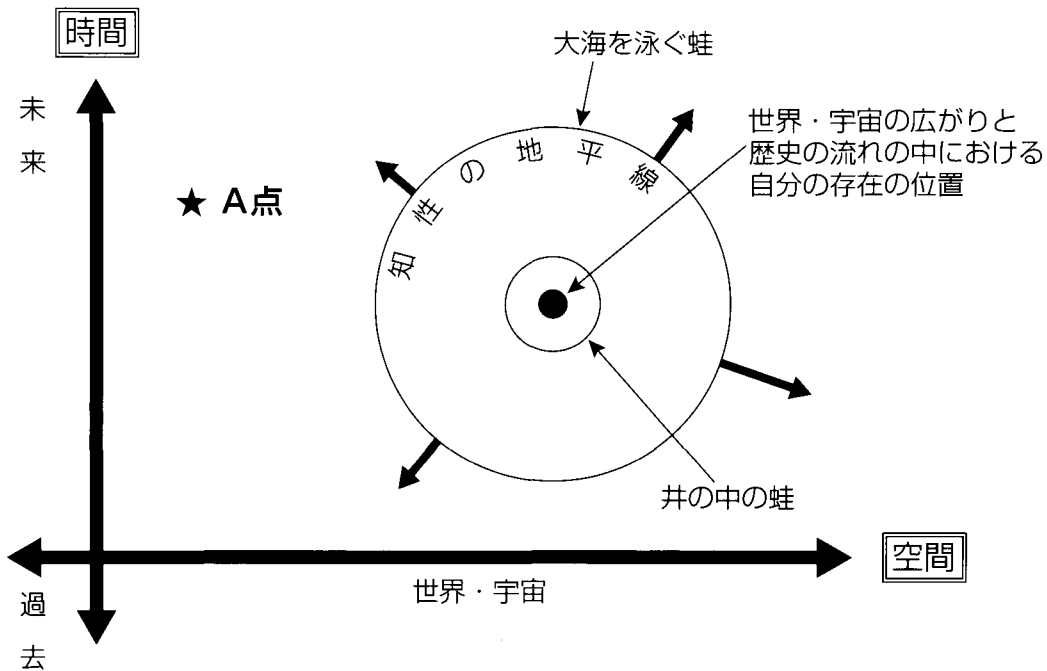
別の言葉で言い換えるなら、人間という存在は、両刃の剣なのです。ですから、我々が人間として生まれ、存在しているということは、その両刃の剣をどのように使うべきかについて絶えず考え続ける責任があるということを意味すると考えるべきではないでしょうか。

では、人間がその両刃の剣をより良い意味で使うことができるためにはどうしたらよいのでしょうか。

そのために必要となることの第一は、以上にあげたような、人間が人間であることの特異性について十分に学ぶこと。そして、その特異性を持つ存在であるがゆえに、闇でなく、光を求め続ける責任を負っていること。そして、人間の知性は、闇への傾きに負ける弱さを持っているという現実を自覚することです。では、弱さを克服し、知性の力をより良い形で発揮することによって、人間としての特殊な存在ゆえの責任を果たすことができるようにするために何よりも必要になること何でしょうか。それは、世界と歴史をより広く、長く、高い観点から見渡すことのできる知的視野を獲得し、そうすることによって知性を束縛から解き放ち、知性の本来の力を活性化することなのです。

## 9. 井の中の蛙 と 知的地平線

「井の中の蛙 大海を知らず」ということわざがあります。井戸の中に住んでいる蛙は、井戸の外に大海が存在することを知らない、つまり、物事の考え方が狭い人を揶揄するために使われることわざですが、ここまで書いてきたことに関連させて解釈するならば、井戸の中の蛙とは「自分の現在と、ごく限られた身の回りのことにしか興味を抱かず、他のことは考えることができない人間」のたとえであるといえます。この意味をよりわかりやすくするために、もうひとつのたとえを使いましょう。



数学の授業で座標軸という概念を学んだでしょう。座標軸のX軸を「空間の広がり」、Y軸を「時間の広がり」ととらえ、X軸とY軸が交差するどこか1点が、現在の自分という存在の空間的、時間的位置であると考えてください。そして、その位置から円が広がっていくとします。この円は知性の働きによって広がっていく「知性の地平線」です。

知的地平線の円の中には、自分が知っているもの、理解しているもの、なじみのあるものです。しかし、地平線というものは、その先にあるものは見えません。それと同じように、知的地平線の外に存在する物事（この図でいえば、A点）については、興味を抱くこともできなければ、そもそも、それが存在していること自体を知るところか、想像することもできません。A点がどれほど、自分にとって、人間にとって、世界にとって重要な存在であろうとも、そして、A点と自分の今を関連させて考えることによって、今の自分がなしうる行為をより良いものにする可能性があるとしてもです。

## 10. 大海で泳ぐということ

人間という存在が両刃の剣であることを理解した人間、それゆえに、どのような行為をするにも、できるだけ広い世界から、長い歴史の視野を持ってそれを行うことが大切であることを理解した人間は、どのようなことを考えるでしょう。

そのような理解を得た人間は、まず、「自分という存在は、この森羅万象と歴史の中のどこに位置しているのか」という問いを抱き、その問いに導かれて、世界と宇宙の広がりや歴史の流れの中における自分の位置を座標軸の中に探すでしょう。これは、自分が立っている足下を確認する作業です。

そして、その後、自分の周りに広がる知性の地平線である座標軸上の円をできる限り広げようとするでしょう。なぜなら、知的地平が広がれば広がるほど、自分という人間はよりよいものを生みだし、あるいは、すでに存在する人間事物をより良いものへと変化させることができ、そうすることによって自分の行為のひとつひとつが破壊ではなく建設につながる可能性が高まるというダイナミズムがわかってくるからです。

また、知性の地平線を広げる道程には、A点のような未知の存在との遭遇の可能性が満ちています。未知との遭遇の驚きは感嘆へとつながり、やがて、未知なるものにあふれる精神の大海の広がりへの畏敬の念を生みだし、その経験こそが、知性の地平線を更に広げたいという希望を強くかき立てることになるのです。

先に述べた小柴さんの話に戻りましょう。この知的地平の話はバックにおいて考えると、「(先生の研究は)どんな役に立つのですか」という質問に対する、小柴さんの「役に立ちません」という答えにはひとつの主張が込められているように思えてくるのです。小柴さんはこう言いたかったのではないのでしょうか。

自分たちの研究の成果の重要性は、A点のように、現在の人間が持っている知的地平の中では見えません。現在という一地点における人間の限られた知的地平の中にあるもののみが「意味をもつ」のであり、「役に立つ」と考える、つまり、井戸の中の蛙の視点からのみ、その意義をとらえようとすれば、自分たちの研究の成果は明らかに「役に立たない」のです。しかし、現在の人間の限られた知的地平(井戸)の外には、我々のいまだ知らない世界(大海)が広がっており、人間の知性はいまだ知らない領域に向けて広がり続けることを絶えず欲しており、そのような知性の欲求に基づいて探求し続けることによって人間全体の知的地平が広がり続けることによってのみ、この研究の意味が見えてくるのだ、と。

先に、私は次のように書きました。人間の知性はなぜ特殊なのか、と。今、この問いに答えてみましょう。

他の動物のそれに比べて、人間の知性が特殊であり、特別な能力が与えられているのは、人間には、この世界と歴史をよりよい方向に向けて動かすよう期待されている役割があり、その役割を果たすためにこそ、この知性が与えられている。そして、知性を本来的に働かせることによってより良い世界と歴史を築くプロセスに参加すること、そこにこそ、人間が人間として存在する究極の意味と喜びがあるのです。こんな風に考えることができるのではないのでしょうか。

では、以上のことを考えながら、「教養教育」とは何かと問うたとき、どのような答えが得られるのでしょうか。

## 11. “Liberal Arts” は「井戸からの解放」

大学教育の一つの基本をあらわす“liberal arts”という言葉があります。日本では、従来、「教養」と翻訳されることが多く、専門教育の前座としての教育、専門教育を「刺身」にたとえれば、教養教育は「刺身のツマ」というふうに、その役割が過小評価されることが多かったようです。

しかし、ここで、あらためて、その言葉のもつ意味を考えてみると、 “liberal” という言葉が、“liberate（解放する）” という動詞から派生していることに注目せざるを得ません。つまり、教育は本来、人間を何らかの囚われから解放するものであるということです。

では、我々が人間としてより本来的に生きるために、解放されなければならない囚われとは何でしょうか。その囚われとは、知性の欲求が動物的欲求や、様々な恐怖に従属させられることによってブレーキをかけられ、その結果として、精神が限られた狭い井戸の中に閉じこめられるという束縛です。となれば、知的地平線を広げることによって、この「精神の井戸」から人間を解放することこそが、教育が目指す最重要課題であるということになるのではないのでしょうか。

人間はその優れた知性によって様々な理解を獲得し、様々な物を作り出すことができます。その結果として、多量の知識が蓄積され、それらの知識と作り上げた人間事物の取り扱いを分担するために、専門家というものができてきます。しかし、どんなに多くの専門知識を得ようとも、どれほど特殊技術に長けていようとも、精神が狭い井戸の中

にとらわれて生き続ける限り、それらの専門知識と技術は「井戸」の中だけに通用する発想によって支配されるほかはなく、狭い知的地平線の中にとどまって、動物的欲求を優先しようとする行為は早晩、ダイナマイトがそうであるように、良き物として生み出されたはずの物を使って、この世界を発展ではなく墮落へと、進化ではなく滅亡へと導く引き金となりうるのです。

大学に専門教育を求める度合いが強い時代にあって、“liberal arts”の教育を大切にすることは、社会的ニーズに合致しないという批判を受けることがあります。しかしながら、社会的ニーズというとき、「今のことだけ」、「自分のことだけ」という、知性が「井の中の蛙」状態にあって欲せられるニーズと、可能な限り地平線を広げ、いまだ知りえぬ地平線の外の世界の存在を頭においた上で必要と理解されるニーズを区別することはどうしても必要です。そして、ごく狭い知的地平から欲するものを追及することと、人間の存在がもたらす善と悪の可能性を考慮し、世界と歴史がより健全な方向に発展するために必要と考えられるものを希求することの、どちらを優先させなければならないかという区別も。

人間本来の知的欲求に従って、無制限に知的地平線を広げる訓練をほどこされ、その訓練の結果として、世界(宇宙)と歴史のより広く、長く、高い観点に立って、人間として自分がどのように生きるべきかと発想することのできる人材が一人でも多く世に送り出されることができれば、社会のニーズが、「動物的欲望中心のニーズ」から「知性の欲望に基づくニーズ」に移行していくことが可能になるのです。

自分の住んでいる井戸が世界のすべてだと思っていた蛙が、井戸の外に大海があることを知る。そして、大海で泳いでみて、大海原で泳ぐことの心地よさと喜びを経験し、また、大海が果てしなく広がり続けている様に驚く。そのような経験をした蛙が井戸に帰り、その井戸の中の蛙たちに大海の存在を教える。さらに、井戸の中に大海とつながる横穴を掘り、井戸の中の世界がいつでも大海と結ばれてよどみなく広がるように改善する。そのようなことができる蛙——大海を泳ぐ蛙——を育てること。それが「教養」と名付けられた教育が目指すべき基本であると考えられるのです。

あなたも大海で泳いでみたいと思いませんか？